

2015年  
6月25日  
木曜日

# 本郷 亮 教授（経済学史）

## 競争の倫理

競争とは文字通り「競い争う」と。受験・就職・出世・政治・経済、どれもこれも競争であり、それが厳しい現実である。さて、動物界の競争と人間界の競争との違いは何か？最大の違いの一つは道徳の有無だろう。ケモノの争いは弱肉強食の生存競争であり、守るべきルールはなく、生きるためなら何をしてもいい。他方、人間の競争には諸々の道徳や法がある。ただしそれらが不完全であるほどに、あるいはそれらの可能性を諦めるほどに、人々の競争はケモノの争いに接近してゆく。

私たちは皆、壮大な「人生ゲーム」のプレイヤーと言ってよい。それゆえまず、競争ゲームの倫理的最低条件と言える「公平性」(fairness, すなわち機会均等) について考えよう。ハーバード大学の政治哲学者ジョン・ロールズは、名著『正義論』(A Theory of Justice, 1971) などで、次のような有名な議論を展開した。すべてのプレイヤー（男と女、健康者と障害者、豊かな親の子と貧しい親の子、途上国の人々と先進国の人々、等々）にとって公平な制度（ルール）とは、どんなものか？皆で議論して公平な制度を作ることにしてしよう。だが、皆それぞれ自分が都合のよいルールを提案するので、意見はまとまらない。結局、実際の多くの場合にそうであるように、多数決という強制力によって多数派（例えば健康者）が少数派（例えば障害者）を抑え込むだろう。これではフェアな競争にならない。しかしあくまでも想像上の話だが、もしその会議に集う人々が、まだ生まれる前のいわば精神のみ（肉体なし）の人々であり、自分の性別、先天的障害、親の財産、生まれる国などに

ついて「あらかじめ知ることができない」とすれば（これを「無知のヴェール」と呼ぶ）、自分がどんな条件下に生まれても不利にならないように、できるだけフェアな社会制度を作っておこうと思うのではなにか？ロールズによれば、こうした「無知のヴェール」のもとで皆の合意によって形成されるルールこそ、フェアな競争をもたらす社会制度である。ロールズの議論は、実現不可能な空想論であるとはいえ、万人に公平な社会を考えるさいの一つの評価基準を提供してくれる。

最後に、人間の競争のもう一つの重要側面を見るために、「スポーツ精神」に注目したい。すなわちそこには、フェア・プレイ（公平）の要素に加えて、「友愛」(friendship) という独自の要素がある。理想的なスポーツ精神のもとでは、選手は互いに敬い合いながら、しかも互いに全力で争うのである。

自由競争の思想は、「勝てば官軍」式のケモノ的ダーウィニズムではない。人間の競争には、「公平」（機会均等）と「友愛」（勝者が敗者を見下す発的に思わないこと）が必要ではないだろうか？ 私は、その両者を併せもつスポーツ精神のうちに、最も美しい競争社会の萌芽が、未来のためのヒントが、あるように思う。■